新聞時評

文化活動団体
「熟塾」代表
原田　彰子

JR西再生への道のり、追い続けて

愛する家族を突然失う底なしの喪失感は筆舌に尽くしがたい。10年前、朝いつものように母と食事をして出勤。帰り道、自宅方向に向かうパトカーに気付き、「何かあったのかしら。母に言わないと」と思った。実はパトカーは、母の検視のために私の家に向かっていた。エプロン姿のまま、母は心筋梗塞で、独りで黙って逝ってしまった。あまりに突然の死を受け入れるまで、しばらく時間がかかった。あの朝、最後の別れだと分かっていたら、もう一度振り返ってでも顔を見たのに、互いに言葉を掛け合ったのに……と悔やまれて仕方がない。

尼崎脱線事故

事故や事件で突然家族を失った遺族の記事を目にするたびに、あの日に引き戻されたかのように心が痛む。ましてや、事故や事件には社会的な原因がある。遺族は、家族の死だけではなく、それら社会のひずみと、向かい合わなくてはならない。

そして、また大事故が起こった。4月25日夕刊1面＜急カーブで脱線 横転／快速、マンション激突／尼崎・JR福知山線＞。目を疑うような、大破した電車の惨状が1面を覆った。26日夕刊3面＜肝心な情報「調査中」／「置き石」公表だけ早く＞では、救出作業が続く最中、事故の全ぼうも見えないというのに、責任逃れとも取れるJRの発表に、閉口した。

遺族への謝罪、部下への指示など同社のトップがどう行動するかは気になる。しかし5月1日朝刊経済面＜JR西 後任選び難航も／会長、社長の引責辞任必至＞には違和感を覚えた。現在の役員が誰かは必要な情報としても、メディアとしては、誰が次のリーダーになるかだけではなく、役員の引責辞任で責任がたらい回しにされないようにこそ注視すべきだ。事故を繰り返さない安全に運行されるJR再生への道のりを提言し、追い続けてもらいたい。それが犠牲者と遺族の切なる思いであり、JR利用者の希望するところだ。

新聞記者の使命

そんな中、同日朝刊1面に大きく取り上げられていた＜1両目後部で負傷 本紙記者・久田宏／107人の死 どう向かいあえばいいのか＞の手記からは、社会面に犠牲者遺族の悲痛な声が掲載されている中、新聞記者の使命として筆を執った苦悩がうかがわれた。まさに、この大惨事と向かい合わなければならないのは、JR関係者だけではないと思う。

拝金主義的な利益優先、成果を重視するだけの競争社会や便利さだけを追求した社会の体質が変わっていったのは、会社だけの責任だろうか。

我々は〝より速く、より便利に〟ばかり求め過ぎてこなかったか。そんな社会の気風作りに加担していなかったか。心の緩みはなかったか……。

国民一人ひとりが107人の犠牲と向き合わなくては、社会は何も変わらず、安全が遠いものになってしまうと思う。

◇

この論評は大阪本社発行の紙面をもとにしました。

はらだ・あきこ　1958年大阪生まれ。商社勤務の傍ら、94年大阪から情報を発信する文化活動グループ「熟塾」を旗揚げし代表を務める。関西の歴史探訪イベントや介助犬シンシアや阪神大震災のチャリティーを開き、04年第7回なにわ大賞を受賞。